

## 古川彰教授退職記念号によせて

著者	難波 功士
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	133
ページ	7-8
発行年	2020-03-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00028544">http://hdl.handle.net/10236/00028544</a>

## 古川 彰教授退職記念号によせて

社会学部長 難 波 功 士

古川彰先生は、1985年3月に京都大学大学院農学研究科（博士課程）農林経済学専攻（農学原論）を単位取得満期退学され、京都大学大学院文学研究科社会学専攻研修員を経て、1986年4月に中京大学社会学部（2007年より現代社会学部）に専任講師として着任され、1990年4月よりは同助教授、1997年4月よりは同教授の職に就かれました。また、1992年4月より中京大学大学院社会学研究科にても教鞭をとられました。

そして、愛知県立大学文学部日本文化学科（「民俗学」担当）、同大学院国際文化研究科教授を経て、2001年4月からは関西学院大学社会学部、同大学院社会学研究科博士課程前期課程教授として務めてこられました。また、2003年3月には京都大学より博士（農学）の学位を授与され、2004年4月より関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程教授としても後進の指導にあたってこられました。この間、北京師範大学日本学研究中心客員教授やネパールのトリブバン大学客員教授なども務めておられます。

先生のご専門は、まずは「環境社会学」ということになります。学位論文をもとにした『村の生活環境史』（世界思想社、2004）は、「地域生活者の日常生活をその生活の視点から明らかにする方法であるための生活環境主義」にもとづく重要な著作として、今日に至るまで広く参照され続けています。この生活環境主義のステートメントとして、やや長くはなりますが『村の生活環境史』の一部を引いておきます。

「私たちがふだん暮らしを営む生活世界には、西欧近代にルーツをもつ合理的で論理的な知の体系や制度とは異なった、さまざまな知恵や制度が埋め込まれていた。それらはたしかに明示的でも「科学的」でもないかもしれない。しかしそうした一見非合理で言語化されない、ローカルな知のありよりのなかに、地域社会と環境を保全してきた力を認めることができた。今日の環境問題を考えるとき、このようなローカルな地域社会が生活のなかで育んできた知恵と実践を、否定的にとらえることなく見直してみようというのが、生活環境主義の出発点である」

同書ではこうした立場から、琵琶湖畔の村の水利や漁業、神事の慣行、さらにはヒマラヤの森林管理などをテーマに、「小さな共同体」の営々とした実践が掘り起こされていきます。地球環境問題に焦点があたる一方で、忘れ去られがちなローカルな「知恵や制度」を丹念に再構築していく古川先生の方法は、多くの研究者に影響を与えてきました。また、設立当初から関わってこられた環境社会学会において、会長をはじめ要職を歴任してこられた点も、環境社会学という領域の成立・発展に果たされた先生の役割の大きさを示しています。

しかし、環境社会学における特筆すべき成果の一方で、古川先生は社会学の枠の中だけにおさまらない、学問的営為を続けてこられました。所属学会をみても、環境社会学会、日本社会学会は当然のこととして、日本民族学会、日本民俗学会、日本生活文化史学会などでも要職を務めてこられました。農学を出発点としつつ、社会学、歴史学、民俗学、地理学、地域研究などさまざまなディシプリンを越境し、資料・文献を渉猟しながら対象に迫っていく先生独自の学問スタイルは、幅広い領域で高い評価を得てきました。『枝下用水史』（風媒社、2015年）にて「農業農村工学会賞」を授与されたこと一つをとってみても、古川先生の関わる学問領域の広さがうかがわれます。

そして、先生の学問の特徴として見逃せないのは、その国際性です。先生のフィールドはシベリヤ山麓にまで広がっており、世界的な研究拠点を作ることを目的とした、大規模な研究助成事業「20世紀COE (Center of Excellence)」に関西学院大学社会学部を中心としたプログラムが採択された際には、2003年から5年間、副代表を務められ、その研究プロジェクトの成果をまとめた英文による著書や編著書なども多数刊行されています。

教育者としては、関西学院大学着任後は、とりわけ大学院における研究者養成に手腕を発揮されました。2009年4月から2010年3月まで社会学研究科にて大学院教務学生委員（現在の研究科副委員長）を務められ、その間、2008～2009年度は大学院教育改革支援プログラム（大学院GP、GPはGood Practiceの略）副代表、2010年度は同代表でもありました。海外の大学院との交流、院生主体の研究会の立ち上げ、院生たちによる書評誌の発行など、今日まで続く大学院活性化のための施策は、古川先生を中心に始まったものです。また、教育面で特記すべき事項としては、1996年4月より現在に至るまで続く、京都大学文学部社会学教室ほかとの合同調査実習があります。三重県熊野市・御浜町・尾鷲市などに継続的に通うことで、学生・院生たちの調査者としての能力を飛躍的に高めてきました。また、民俗学や環境社会学の入門書とともに、先生ご自身の経験を活かした社会調査論・社会調査法のテキストづくりにも尽力されてきました。

学内の役職としては、2008年度より大学博物館開設準備副室長、同副館長として、今日に至るまで大学博物館の設立・運営に貢献してこられました。社会活動としては、西宮市・宝塚市・豊田市などで審議会委員を務められ、現在は宝塚市環境審議会、同都市計画審議会委員ほかに就いておられます。学問の世界にとどまらず、幅広い領域での先生のご活躍の背景には、京都大学山岳部にて鍛えられた「パーティ・マネジメント」のノウハウの蓄積、リーダーとしてのご経験があると拝察しております。

古川先生は、2019年12月に設置された関西学院大学の特定プロジェクト研究センターである「デジタル・ヒューマニティーズ研究センター」に研究員として参加されてもいます。これらを拠点に退職後も旺盛な研究活動を続けられることでしょう。今後の先生のなおいっそうのご活躍とご健勝を、学部一同祈念しております。